

「世界環流プログラム」の教育的効果分析にかかる基盤研究 ～戦略性分析を国際教育交流論の視座から～

プロジェクト代表者：中本 進一（国際交流センター・教授）

1 研究目的

平成 21 年度より、実践型国際教育プログラム「世界環流」（以下、環流）が開始された。プログラムの目的・目標には①「キャンパスの国際化」と②「留学生の日本定着」が掲げられているが、これらの目標の達成は今後の本学の国際交流戦略（特に留学生政策）の方向性を示唆する上で重要要件となる。

本研究においては、①の教育的効果分析と②の戦略性分析を目的とした。

2 研究の進め方

2-1 アンケート調査

教育的効果分析：環流に参加した学生（日本人学生・留学生）の国際意識の変革に焦点を当て、学生、受け入れ・派遣を行った教員、業務を担当した職員を対象にアンケート調査を実施した。

戦略性分析：本学の学生を受け入れた海外の研究・教育機関・国際担当者（職員を含む）を対象にアンケート調査を実施した。

2-2 聞き取り調査

教育的効果分析：環流に参加した学生（日本人学生・留学生）の国際意識の変革に焦点を当て、学生、受け入れ・派遣を行った教員、業務を担当した職員を対象にサンプリングとして聞き取り調査を実施した。内訳は以下の通り：

派遣学生：26名

受け入れ学生：8名

教員：26名

職員：3名

戦略性分析：本学の学生を受け入れた海外の研究・教育機関・国際担当者（職員を含む）を対象にサンプリングとして聞き取り調査を実施した。

2-3 外部評価

環流関連以外の本学協定大学・国際担当者にプログラムの意義や実績データを開示し、第 3 者からの評価・提案等をアンケート調査と聞き取り調査からデータとして抽出した。

3 研究成果について

3-1 国際意識

環流プログラムに参加した日本人学生の 90%が短期間の派遣ではあったが自己分析の中で国際意識が強まったと回答している。また派遣した教員からも研究を含め学生の国際意識に変化があったという回答も多かった（75%）プ

プログラムの特徴は在外研究者とのつながりを利用した学生の交流であり、研究テーマが設定されることと、派遣される学生が早期卒業・秋季入学のギャップタームを利用できる（少なくとも大学院進学 of 資質を兼ね備えている）学生であるという条件による選抜推薦を受けている点である。

それでは、語学面に焦点を当てた場合どうであったか。一般短期海外派遣プログラムの教育効果と比較した場合、派遣期間が1か月ほどにとどまっているために語学的な面での能力向上は限定的な結果となった。コーディネータ（カザフスタン籍）に協力を仰ぎ、帰国した派遣学生に英語によるインタビューを行ったところ、以下のようなデータを得られた。

1. 国際性：26名中21名（88%）この数字は国際意識の調査したアンケート調査で得たデータとほぼ変わらなかった。
2. 英語コミュニケーション力：26名中7名（約27%）また顕著な語学力の伸びを見せた学生はそのうちの4名であった。

また、受け入れ学生を対象にしたアンケートでは、8名中5名が「是非埼玉大学をもう一度訪れたい」と回答しており、環流プログラムの戦略的効果も見え始めているといえよう。

4. まとめ：提言にかえて

派遣・受け入れの全般を見る限り、初年度としては順調な滑り出しを見せていると評価できる。ただし、課題が見えてきたことも否めない事実である。具体的には、派遣する学生の語学力をどう補ってゆかという教育的側面と受け入れた学生が将来埼玉大学大学院生や研究生として戻ってくるための戦略的側面である。

まず、派遣学生に関しては、明らかに派遣計画を早い段階から設定し事前のプレゼンテーション能力開発セミナーや、レポートにおける作文能力上達のための個別指導が必要であるということ。事前のオリエンテーションプログラムは危機管理を中心としているが、それに語学トレーニングを組み入れてゆく試みが求められる。これらにより、派遣先での人的ネットワーク拡大、研究効果の増進が期待できると思われる。

受け入れ学生に関しては、教員等による帰国後の連絡を通じ、研究を深化させるためのヒントの提供が中心となるべきであろう。また日本適応プログラム（文化体験、見学旅行等）を通じて、日本ファンをいかに増やすかについての更なる工夫が求められるところである。つまり、埼玉大学理工学研究科の研究の質を戦略的に活用すること、そして何より日本という目的地が受け例学生にとって将来を垣間見せる場所であるということを知覚できる戦略的プログラム構成の再考察が不可欠となることである。

継続性のある教育プログラムに仕上げるうえでは、既存のGYプログラムや、短期海外派遣プログラム（STEP S）との戦略性における比較が今後重要課題となろう。限られた資金をどう配分するのか、どういったプログラムを大学が「商品」として学生に見せてゆくののかという具体的な議論が早急に求められる。短期間の海外派遣や受け入れが可能な世界環流プログラムは、次世代型交流プログラムと言っても過言ではない。また「選ばれる」エリートプログラムという視点も戦略性を豊富に含んでいると言えるだけに、上記に掲げた2点の提言を以って、今回の報告としたい。

以上。